

〈Review〉 Economic values and Pecuniary values

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 内田, 成 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/677">https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/677</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 経済的価値と金銭的価値

### Economic values and Pecuniary values

内 田 成

UCHIDA, Minoru

#### 1. はじめに

ソースタイン・ヴェブレン（1857-1929）はアメリカの生んだ独創的な思想家であり、制度派経済学の創始者としても知られている<sup>(1)</sup>。ヴェブレンは人間の本能的構造の中に対立する二つのグループを見出した。ひとつは利己的あるいは取得的な傾向に中心をおくもの個人的であり、もう一つは社会的なものであり、協調的あるいは親性的傾向を含む複合体である。これらの対立する傾向が人間文化において、その対応物をもっている。人間文化に含まれる経済的なセグメントにおいて、それは産業的職業と金銭的職業である。産業的職業は機械的なテクノロジーの論理を伴い経済的価値の生産に関連している。これに対して金銭的な職業は価格体制の企業の論理を伴い金銭的な価値にかかわっている。つまり資本主義的システムは人間の本質の中に根強く存在する心理学的な対立に文化的な表現を与えているに過ぎない、と考えた。このような基本的な二分法がヴェブレンの経済学を貫く一つの考え方である、といえる<sup>(2)</sup>。

そこで、本稿では、制度派経済学研究者として著名であるアラン・G・グルーチャー（Allan Garfield Gruchy, 1906-1990）の著作『近代経済思想：アメリカの貢献』に収められている論文「経済的価値と金銭的価値の理論」<sup>(3)</sup>を採りあげ、上に述べたヴェブレンの経済学を特徴づけている基本的二分法の持つ意義を明らかにしよう、と考えた。

#### 2. 基本的二分法

ヴェブレンは近代の経済体制が二つのタイプの価

値、すなわち経済的価値と金銭的価値を作り出す組織体である、と考えた。この区分は産業と企業の間的基本的な二分法に一致している。産業は経済的価値に関連し、企業は金銭的価値に関連している。歴史的にみると、経済体制の進化のある時期においては経済的価値と金銭的価値とは緊密に混合していた。その当時においては、二つのタイプの価値は一致していたので、調和的な関連があった、といえることができる。そのような状況の下では、金銭的な価値は経済的価値を反映していたし、おおよその尺度であった。経済体制の発展の別の時には、これら二つの価値のタイプの流れは相互に離れて、二つの価値のタイプの間の不一致が現われてきた。このような状況の下では、金銭的な価値は、もはや経済的価値の適切な尺度ではない。金銭的価値と経済的価値との間の一致の欠如から社会が直面している根本的な経済問題が生じてくる。ヴェブレンの経済分析は経済的価値と金銭的価値との間の一致の欠如がどのように生じ、またそれはどのように除去しうるかについて説明している<sup>(4)</sup>。

ヴェブレンによれば、経済的価値は産業体制によって生産される実質的価値あるいは実態的価値である。これらの実質的価値あるいは経済的価値とは有用な財貨や商品のことであり、それらは近代の大規模テクノロジーに影響を与える産業システムの最終生産物である。これらの有形の商品の「有用性」あるいは「実用性」は、私的側面と社会的側面という二つの面を持っている。私的な観点から、それが何らかの種類の個人的なニーズに満たす場合、商品は有用である。有形な商品は個人によって多くの個

キーワード：産業、営利企業、金銭的価値、産業的価値、資本主義

Key words : Industry, Business enterprise, Pecuniary values, Industrial values, Capitalism

人的ニーズの中の何かひとつを満すが、社会的なニーズを満たさないかもしれない。ヴェブレンはニーズあるいは目的の二つのタイプ、すなわち当面のニーズと究極のニーズが存在する、という。例えば、利己的な個人が社会を犠牲にして自分自身のニーズを満たす状況の場合のように、これらのニーズは必ずしも調和しない。つまり、ある財貨あるいは経済的価値は個人の当面のニーズを満たすかもしれないが、その共同体の究極的なニーズは満たさない。ヴェブレンは本当に有用であるためには、有形財は個人と社会双方のニーズを同時に満たさねばならない、と考えた。経済的価値の有用性あるいは実用性は、このように私的、社会的な双方にかかわる<sup>(5)</sup>。

どのような時に物的な生産物が社会的に有用あるいは実用的なのか？生産物が社会的あるいは本質的な有用性を持つためには社会にとっての有用でなければならない。ヴェブレンにおいては生産物が社会によって有用なのは、それが個人の生物学的傾向を充足させ、したがって種の生存闘争に役立つことを容認する場合である。社会的に有用な生産物は「非個人的な有用性のテストをみかさねばならない。有用性は人類一般という観点からみなければならない。このテストは人間生活全般を強化することの直接役立たねばならない。つまり、それが非個人的に考えられた生活過程を促進するかどうかである」<sup>(6)</sup>。もしも生産物がこの非個人的な有用性のテストにかなったならば、その場合その生産物は「社会的実用性」あるいは社会的有用性を持っている。それは、それ自身の中に「盲目的な実用性<sup>(7)</sup>」を含んでいる。それによってヴェブレンは衝動的あるいは浪費的な消費の要求に合致するように、物的生産物に付け加えられてきたすべての過剰なものを取除いた後で物的生産物に見出される基本的あるいは基礎的な有用性を意味した。盲目的な実用性はその財貨物的本質から引き出された物的な実用性、有用性の根本にある。市場の金銭的価値よりも、より「本質的」な経済的価値を形成するのは、その中にある実体の核心である<sup>(8)</sup>。

いつ生産物が社会的有用性あるいは盲目的な実用性を持つのか、またいかにこれらの意思決定が行な

われるべきなのかを決めるのか？ヴェブレンはこれらの問題に次のように答えている。「経済的妥当性」あるいは社会的有用性というどんな問題においても、最高裁判所は製作本能である<sup>(9)</sup>。製作本能を持っているから個人は「先入観のない常識」を与えられている。それは物的生産物が「社会における正味の利益あるいは生活の充足」をもたらすような方法で使われるかどうかを決定することを可能にする。製作本能がもっとも十分に発展している個人は、それゆえに、どのような時に、ある生産物が社会的有用性をもっているか決定するのにもっとも適した資質を持っている人間である。

このことは技術的専門家が社会のメンバーであることを意味している。彼らは産業システムが経済価値を生産し、いかにそのような価値の流れが拡大されるか決定するのにもっとも適任である。これらの技術的専門家の観点から、社会的有用性あるいは実用性は機械的効率あるいは技術的効率の問題である。それは工業科学によって設定される客観的、科学的標準によって客観化されるあるいは具体化される問題である。テクノロジー的効率という科学的尺度に関する技術的専門家の間での合意を確実にすることが可能な限りにおいて、物的生産物において見出されるべき社会的有用性あるいは実用性の本質と範囲に関する科学的意見の一致をみることは可能である。決して曖昧で管理できないはかり知れないものどころか、機械的効率の観点から解釈された場合、社会的有用性は客観的で管理できる概念である。ヴェブレン独自の用語法では、社会的実用性は、その場合、「機械的、科学のおよび心理学的効果という客観的観点に還元しうる物的環境」において「本質的な」基礎をもっている<sup>(10)</sup>。

単なる「盲目的な実用性」を超えた実用性あるいは有用性は困難な問題を与える。ヴェブレンが関心を持った実用性は主に人間の物的ニーズに関連している。彼は物的ニーズを超えた別のニーズが存在すること、それゆえに社会にとって利害のある経済的あるいは物的実用性以外の別の種類の実用性がある、ということに十分に気づいていた。しかしヴェブレンは人間の非物的ニーズの充足に何ら特別な関心を持たなかった。彼は経済的実用性があらゆるその他

の種類の実用性にとって基本的であり、ひとたび社会が経済的価値あるいは有用な物的生産物を十分に供給したならば、人間の非経済的ニーズの充足はその場合、相対的に単純なことである、と考えていたように思われる。彼は人間の生存は単なる経済的あるいは物的な実用性の生産という問題ではない、ということを理解していた。

実質的あるいは経済的価値と対象なものに交換価値あるいは金銭的価値がある。経済的な価値が産業体制の最終的な生産物であるのに対して、金銭的あるいは市場価値は企業体制の最終的な生産物である。金銭的価値は交換価値である。それは事情に働いているさまざまな力によって決定される。金銭的価値は「売ることができる」という不確実な基礎に依存している。売ることが出来る可能性によってヴェブレンは、その所有者にあるアイテムが金銭的利益をもたらす可能性を意味している。売ることができるということは「金銭的実用性」の問題であり、つまり、金銭的利益を蓄積するという目的にとっての有用性をもっている。

それは物的実用性や社会的有用性の変化に応じて変動するのではなく、大衆あるいは群集心理の変化に応じて変化する。それはパニックや投機的インフレにおいて非常に明らかである。それらはパニックや投機的な期間の気まぐれなできごととすぐに反応するので、金銭的な価値はしばしばより本質的な経済的価値に殆ど関連をもたない。そして、結局それらは経済的価値とは一致しえない<sup>(11)</sup>。

### 3. 金銭的価値と経済的価値

次にグルーナーは金銭的価値と経済的価値について歴史的に考察している。手工業の初期の段階では、金銭的価値と経済的価値とは非常に一致していた。それらは「本質的に」相互に影響していた、とヴェブレンはいう。この段階の産業においては、親方のいない職人は賃金労働者を使わずに、またいかなる資本も借りてはいなかった。彼らは彼らの生産物に自分自身の直接的な労働と彼らが使っている道具に対して投入するごくわずかの労働を足したものを投入した。これらの親方のいない職人の生産物は、競争的な基礎で交換された。その結果彼らが交換する

価格は、その労働コストあるいは製作コスト<sup>(12)</sup>のおおよその尺度であった。手工業システムの限界の中では生産をした人々だけが報酬を支払われた。報酬はそれゆえに生産性の函数であった。そして生産性は経済的あるいは金銭的価値のいずれかによって測定することができた。商品の価格はその労働費用に接近したままだったので、経済的価値と金銭的価値との間にいかなる不一致も生ずる余地はなかった。同じくらい技術のある職人との競争は独占的な慣行にいかなる余地も残していなかった。産出量を制限し、価格を吊り上げ、そして物的環境におけるそれらの基礎から金銭的な価値を分離するための機会も殆どなかった。

産業の初期手工業段階以降の経済システムの発展において、ヴェブレンは金銭的価値と経済的価値との一致における漸進的衰退を見ている。しかしながら、これらのふたつのタイプの価値の一致の衰退は、企業体制が本質的に競争的である限りにおいては重要ではない。自由競争が支配的である限り、さまざまな独占的な慣行が物的実用性における基礎から金銭的価値を分離する機会も殆ど存在しない。

世紀の転換期における新しい企業体制の出現は、金銭的価値と経済的価値の一致における急速な衰退の始まりを特徴づけた。金銭的価値と経済的価値との間のこの分離は競争的から独占的な基礎への企業体制の急速な変化の結果である、とヴェブレンは説明している。ここでの独占は一人の生産者による産出量の排他的な支配ではなく、部分的な独占の企業の状態ことである。彼は近代の経済世界において完全な企業統制あるいは厳格な独占の場合を殆ど見出さなかった。彼は営利企業の大部分が自由競争と厳格な独占との間にある、ということに気づいた。つまり、ヴェブレンにとって主要な関心事は、少数の大企業から構成されている巨大な半独占的基幹産業の価格政策および生産政策である。彼は、金銭的価値と経済的価値を相互に本質的に影響しあわないようにさせている最大の原因は、これらの大規模で部分的に独占的な企業である、という見解を持っていた。

大規模法人企業によって、その産出量に設定されている価格は需給の競争的原理によってばかりでは

なく、その取引が産み出す経費についての独占的な原理によっても決定されている。その取引が産み出すものを決定する際に企業は、消費する大衆の反応同様その巨大法人の同業者の価格および生産政策を考慮に入れねばならない。もしも競合者の政策をうまく相殺することができ、効果的な販売技術や広告を通じて購入する大衆の大部分を獲得できたならば、その企業は、その時成功したと判断される。この状況で、その企業の価格あるいは費用は費用あるいは与えられたサービスの使用価値とは何ら関係をもっていない。その生産物の経済的価値に対して成功した企業は今やトレードマークやブランドという名声価値を付加している。この名声価値は物的実用性あるいは社会的有用性の問題ではない。それは社会の物的ニーズに役立つその商品の性能に何物も付加しない。それは、その企業がその他の生産者の生産物の代わりに顧客を自社の生産物にうまく導いたという事実から生ずる代替価値に過ぎない。生産の基本的な費用に対してできるだけ多くの代替価値を付加することによってそれらの金銭的あるいは市場価値を不当に吊り上げることが大規模、半独占的企業の目的である。経済的価値と金銭的価値の間の不一致は、その場合名声あるいは代替価値がその企業の販売技術や広告活動によって作り出され、うまく市場価格に統合される範囲まで拡大される<sup>(13)</sup>。

近代の企業体制のもとでは、もはや一致あるいは本質的に影響しあわない<sup>(14)</sup>のは物的商品の金銭的価値と経済的価値だけではない。同じ状況が資本および労働の双方に関しても見出される。工業設備は有用な物的生産物を生み出すその能力で評価されるだけでなく、その所有者の金銭的な利益を増加させる能力でも評価される。資本は金銭的、産業的という二つの側面をもっている。金銭的な観点から、資本は市場価値あるいは金銭的効率の問題であるが、産業的観点からは、それは経済的価値あるいは機械的効率の問題である。ヴェブレンは、近代企業体制では資本の産業的側面が急速にその金銭的な側面に従属するようになってきている、と主張する。工業設備の機械的効率は、競争的企業体制が独占的な発展に道を譲るようになるにつれてますます注目を受けなくなってきた。次第に資本は、その機械的な効

率に対してよりも、その金銭的な効率あるいは実用性で評価されるようになってきている。営利企業におけるこの新しい発展の結果として金銭的資本と産業的資本の間の不一致が急速に拡大してきている<sup>(15)</sup>。

状況は労働要素に関しても同様である。ちょうど競争という力がもはや金銭的資本と産業的資本を一致させるための十分な力を持っていないのと同様に、競争的な力はもはや「本質的に」関連している労働の生産性と報酬を維持できない。近代の半独占的な企業世界では賃金の支払い基準は生産性ではなく金銭的な実用性である。労働は有用な物的財貨を生産する効率で報酬を得るのではなく、それを利用してひとびとの金銭的利益を増加させる効率で報酬を得る。資本に関して労働は金銭的および産業的側面を持っている。それは営利企業という領域では、非常に急速に独占が自由競争に取って代わるにつれて本質的に相互に影響しあわない。

経済的価値と産業的価値の間の不一致の問題はヴェブレンの余剰理論あるいは純生産物理論を導く。彼は産業の純生産物を、その社会の年々の産出量が「生計費の観点から考えられた場合それ自体のコストを超過し、必要な機械設備のコストを含む<sup>(16)</sup>」総額と定義した。この産業の純生産物は物的生産物の余剰であり、交換価値あるいは金銭的価値の余剰ではない。マルクスとは異なりヴェブレンは余剰交換価値の理論に関心を持たなかった。彼が関心を持ったものは、全産業システムによって作り出される有用な物的財貨の余剰純生産物であり、労働者によって作り出されたいわゆる余剰ではなかった。ヴェブレンは全生産体制の効率の標準として、産業の余剰純生産物に関心を持った。彼は労働者階級の感情を強く動かすように意図されたキャンペーンとして役に立つ、であろう余剰交換価値理論を作り出すことには関心がなかった<sup>(17)</sup>。

#### 4. 経済価値の規定要因

経済価値あるいは有用な物的生産物の純余剰生産物の大きさは三つの要素に依存している。つまり、物的資源、人力およびテクノロジーである<sup>(18)</sup>。これら三つの条件となる要因は、産業の余剰生産物の

生産において同様な重要な役割を演じるわけではない。ヴェブレンの見解ではテクノロジーあるいは製作が産業における支配的な創造力であった。テクノロジーはて不可欠な創造的機能を遂行する現存する機構と見做された。

ヴェブレンは経済価値の生産においてテクノロジーに一定の卓越性を与えたけれども、彼はテクノロジーだけがこれらの価値を決定するとはしていない。経済的価値の単一の原因あるいは決定要素は存在しない。その代りに労働、原材料およびテクノロジーという三つの寄与する要因がある。しかしながら、これらの要因のそれぞれが経済価値の創造において等しく重要ではない<sup>(19)</sup>。

手工業時代において不可欠あるいは創造的要因だったのは労働であった。20世紀の新しい産業体制において、これら三つの生産的要素の間の関連は根本的に変化した。テクノロジー的知識についての社会の共通資本は今や戦略的な創造的要素である。それに対して労働は補助的あるいは副次的な創造的要素に過ぎなくなった。

ヴェブレンが状況によって正当化されると見做した産業の純生産物あるいは「費用を上回る実用性の超過」に対する唯一の権利の主張は、この余剰生産物に対する何らかの貢献をなす人々の権利の主張である。金銭的価値の所有者は、この純余剰生産物のいかなる部分に対しても権利を持っていない。というものの、所有権はそれ自体では純生産物を作らない。そして、したがってそれは収入を生み出さない、からである。しかし法的権利のために、その力によって収入は資本化された富の所有者のところへ行く財産をもっているということは生産的な函数ではない。むしろ、それは、余剰生産物を創造するのに役立つ人々からそれを取り去ることである。ヴェブレンは、生産は製作の問題であるが、他方金銭的価値の所有権は単なる企業あるいは市場操作の問題に過ぎない、と考えた。彼は所有権が生産増大のための刺激であるという古典派経済学の見解を受け容れなかった。彼によれば、非常に複雑な機械経済である近代における生産が強大な生産力を含むテクノロジーと結びついているのは、労働者の製作本能の結果である。一般的に労働者は所有権についての法的権利を

享受するという期待のために働くのではなくて、働くこと、材料を手際よく処理することおよび有用な生産物を創造することに対する人間の性癖のために働くのである。金銭的資産の所有権は、この製作本能を促進するどころかしばしば製作本能の十分な表現に対する、また産業システムの自由な機能に対する障害物としても作用する。ヴェブレンの分析では、報酬に対する権利を与える生産的な要素である代わりに、所有権は全く非生産的な要素である。

同様な方向の論法が近代営利企業の危険負担にも適応される<sup>(20)</sup>。ヴェブレンは危険負担を生産的である経済的機能あるいはその長所が収益であるとはみなさなかつた。正統派経済学者は、危険負担に対する報酬が創意に富んだ活動に対する刺激として働く、と主張した。この主張に対するヴェブレンの返答は、製作本能や好奇本能の働きの結果として、またテクノロジー的発展の蓄積の帰結として発明やテクノロジー的進歩が生じる、ということである。さらにヴェブレンは、金銭的な価値の蓄積に含まれる危険は経済的価値の創造を促進しない、と述べている。近代の営利企業の危険は競合している企業家が金銭的な利益を極大化しようとする場合に創造するリスクである。それらは技術者や労働者にはいかなる関連もないリスクである。さらにまたこれらのビジネス上の危険は産業の純生産物の大きさにいかなる有益な効果ももたらさない。それとは反対に、創造的あるいは生産的要素である代わりに、ヴェブレンの分析によれば、危険負担は人間および機械の十分な利用に不必要な制限をもたらす。財貨の生産の持っている唯一の真に生産的機能から物質および人力を脇へそらす。

ヴェブレンは経済的価値の生産と危険の大部分が非常に容易に国民所得の規模へのいかなる有害な効果もなく除去できる、と信じていた。法人の合併や合同の促進、販売と広告キャンペーン、新しいブランド名の確立、特許やフランチャイズの利用、および企業の暖簾の資本化への試みを伴うあらゆる危険は、それらの除去に関してもいかなる大きな困難も示さない。ヴェブレンは労働人口の基本的な生活の要求を満たす際に含まれる本当のリスクはほとんど存在しない、と考えた。高い程度の成功で技術者が克

服できない唯一のリスクは、さまざまな気候や天候および自然的大災害の発生の結果などである。これらのリスクは個人の責任の問題ではないから、彼らは産業の純余剰生産物から共同体によって供給される。いかなる私的な危険負担機能もその場合には報酬も要求できない。

## 5. おわりに

産業の純余剰生産物に対する唯一の真の請求者は技術者と労働者である。ヴェブレンが心に描いた将来の社会主義的経済では産業の余剰生産物はこれら二つの集団の間に分配される。しかしながら、いかに社会主義的経済が真の財貨の国民所得あるいは経済的価値に寄与した人々に報酬を与えるかについて、いかなる詳細な研究も行っていない。彼は経済的理論化を現実的な実行へ移す積極的な衝動をもっていなかったばかりでなく、国民所得をいかに社会主義的経済に分配するかという問題の中にある多くの現実的問題に本気で取り掛かっていない、という問題点がある<sup>(21)</sup>。

以上がグルーチーの所説の概略である。確かにヴェブレンには現実的なレベルにまで議論を落とし込んでいないという問題点はあるものの、基本的な二分法により提示され、その後ガルブレイスによっても取り上げられた私的商品・サービスと公的なものとのアンバランスに関する議論は重要性を持っているといえる。ヴェブレンの立場は商品・サービスの生産に関して政府の介入を是認する立場であり、大きな政府論といえる<sup>(22)</sup>。しかし、近年取りざたされている地球規模の環境問題などを考慮に入れば、個人的なニーズのみを充足する商品やサービスの開発では、今後は立ち行かないことは明らかである。その意味でも経済的価値と産業的価値という視点は今日でもなお重要性を持っている、といえよう。それゆえ、再びヴェブレンに立ち返り、その考え方を現在の制度的な枠組みの中で再検討することも必要であろう。

## 注

- (1) ダガーによれば、ヴェブレンの制度主義は7つの関連した概念によって特徴づけられる、という。(William M. Dugger, "Veblenian Institutionalism : The Changing Concepts of Inquiry" *The Journal of Economic Issues*, 1995, December No.4, p.1013).
- (2) このような二分法については、たとえば、小原敬士著『ヴェブレンの社会経済思想』（岩波書店、昭和41年3月25日第一刷発行）66頁も併せて参照されたい。
- (3) Allan G. Gruchy, *Modern Economic Thought : The American Contribution* (New York : Augustus M. Kelly · Publishers, 1967), pp.105-115.
- (4) *Ibid.*, pp.105-106.
- (5) *Ibid.*, p.106. J.K.ガルブレイスは『豊かな社会』第17章「社会的バランスの理論」で、私的に生産される商品およびサービスと公的なものとのアンバランスについて論じている。
- (6) Thorstein Veblen, *The Theory of The Leisure Class : An Economic Study of Institutions* (New York : Macmillan Company, 1899), p.99. 小原敬士訳『有閑階級の理論』岩波書店、昭和36年5月25日第一刷発行、99頁。
- (7) Thorstein Veblen, "On the Nature of Capital", *The Place of Science in Modern Civilisation and Other Essays* (New York : Russell & Russell, 1961), p.367.
- (8) Gruchy, *op. cit.*, p.107.
- (9) Veblen, *The Theory of The Leisure Class*, p.99. 小原訳99頁。『有閑階級の理論』では、このように本能、特に製作本能を重視する立場であったが、『製作本能論』では、その立場を修正している。Harold Wolozin, "Thorstein Veblen and Human Emotions: An Unfilled Prescience" *The Journal of Economic Issues*, Vol. XXXIX, No. 3, September 2005, PP.727-728. を参照されたい。
- (10) Gruchy, *op. cit.*, pp.107-108.
- (11) *Ibid.*, pp.108-109.
- (12) Thorstein Veblen, *The Vested Interests and*

## 資料紹介

- The Common Man* (London : George Allen & Unwin, Ltd.,1924). p.28.
- (13) Gruchy, *op. cit.*,pp.109-110.
- (14) Thorstein Veblen, "Industrial and Pecuniary Employments" *The Place of Science in Modern Civilisation and Other Essays* (New York : Russell & Russell,1961),p.303
- (15) Gruchy, *op. cit.*, p.111.
- (16) Veblen, *The Vested Interests and The Common Man*, p.55.
- (17) Veblen, "The Socialist Economics of Karl Marx and His Followers " *The Place of Science in Modern Civilisation and Other Essays* (New York : Russell & Russell, 1961), p.445.fn15.
- (18) Gruchy, *op. cit.*, p.112.
- (19) *Ibid.*, p.113.
- (20) *Ibid.*, p.114.
- (21) *Ibid.*, p.115.
- (22) 例えば、宇沢弘文は制度主義と社会的共通資本という視点からヴェブレンの制度主義を捉えている。宇沢弘文著『ヴェブレン』岩波書店、2000年11月28日第1刷発行、209～213頁を参照されたい。